

アメリカ合衆国ヴァージニア州のプライベート・コレクションにおける新出サンスクリット語写本断簡集

生野 昌範

アメリカ合衆国ヴァージニア州のプライベート・コレクションは *Dīrghāgama* の新出サンスクリット語写本の内の大部分を保有することで知られているが、*Dīrghāgama* 以外にも *Prātimokṣasūtra*, *Vinayavibhaṅga*, *Vinayavastu*, *Samyuktāgama*, *Udānavarga* などの写本断簡を保持している¹。これらのサンスクリット語写本断簡は全て Klaus WILLE (Göttingen) によってローマ字転写が行なわれた。その後、それらの内の *Vinayavibhaṅga* の Pāyattikā 第6条と第7条に関してチベット訳との比較研究が Claus VOGEL と Klaus WILLE によって2000年10月に開始されたが、2003年に中断されてしまった。その後、筆者が2011年10月に K. WILLE による単独の研究結果、並びに C. VOGEL と K. WILLE の共同研究の結果を引き受け、*Vinayavibhaṅga* に属すると考えられうる写本断簡全てについての研究を開始した。本稿ではこれらの写本断簡に関する現在までの研究成果の概要を報告する²。個々の断簡のサンスクリット語テキストは、今後公表する予定である。なお、筆者による研究は、2013年4月–2014年3月（1年）のあいだ公益財団法人仏教伝道協会から、そして2015年1月–2017年12月（3年）のあいだ Deutsche Forschungsgemeinschaft (DFG) からの助成を受けて行われた。ここに記して感謝の意を表す。

I. サンスクリット語写本断簡の内容

これらの断簡の正確な出土地は不明であるが、全ての断簡がブラーフミー文字の Proto-Śāradā (Gilgit/Bāmiyān type II) といわれる書体³で樺皮に書かれている。この書体は、紀元後約6–11世紀にかけて使用されたと考えられている⁴。

既に述べた通り、筆者が研究を開始した当初は全ての断簡が *Vinayavibhaṅga* に属すると考えられていたが、研究を進めていくうちに *Vinayavibhaṅga* 以外の文献に属する断簡も混在することが明らかとなった。現在までに同定された文

¹ このコレクションの来歴や全容などに関しては、HARTMANN & WILLE 2014 を参照のこと。

² 筆者の研究に関して長期間にわたりご助力を賜った Klaus WILLE 博士に感謝いたします。

³ この書体の名称に関しては、SANDER 2007 を参照のこと。

⁴ SANDER 1968, 2014: 173, cf. MELZER 2014: 229f., 262–268. なお、*Dīrghāgama* の写本に関して ‘a radiocarbon test initiated by one of the dealers in London resulted in a date between 764 and 1000 as the 2sigma range’ [HARTMANN & WILLE 2014: 137, cf. ALLON *et al.* 2006: 279–280, esp. n. 3; SANDER 2014: 174] とのことである。

献は、*Vinayavibhaṅga*, *Vinaya-uttaragrantha* 内の *Upālipariṣcchā*, *Samyuktāgama*, *Dīrghāgama* の *Apannakasūtra* の4つである。同定するにあたって、それぞれ以下の文献を用いた。

1 *Vinayavibhaṅga*

チベット訳：'Dul ba rnam par 'byed pa、並びに漢訳：『根本説一切有部毘奈耶』

チベット訳は De dge (=D), Phug brag (=F), Śel kar/London (=L), sNar than (=N), Peking (=P), sTog (=S) の6つを校合した⁵。

2 *Vinaya-uttaragrantha* 内の *Upālipariṣcchā*⁶

チベット訳：'Dul ba gzuñ dam pa⁷ 内の *Upalis žus pa*

De dge (=D), Phug brag (=F), Śel kar/London (=L), sNar than (=N), Peking (=P), sTog (=S) の6つを校合した。

3 *Samyuktāgama*

漢訳：『雑阿含経』もしくは『別訳雑阿含経』

パーリ文献にパラレルがある場合は、それらも参照した。パーリ文献は Pāli Text Society (=PTS) 版、Chatṭha Saṅgāyana 版、並びに Mahidol 版を参照したが、以下の表では PTS 版の箇所のみを記す。

4 *Dīrghāgama* の *Apannakasūtra*⁸

パーリ語テキスト：*Majjhimanikāya* の *Apaṇṇakasuttanta*

Apaṇṇakasuttanta は Pāli Text Society (=PTS) 版、Chatṭha Saṅgāyana 版、並びに Mahidol 版を参照したが、以下の表では PTS 版の箇所のみを記す。また、中央アジア出土のサンスクリット語断簡も参照した⁹。

⁵ *Vinayasūtra* という律のハンドブックがサンスクリット語とチベット語で現存しており、*Vinayavibhaṅga* のサンスクリット語断簡をよりよく理解するために非常に有益な情報を含んでいる。そこで、*Vinayasūtra* の内で *Vinayavibhaṅga* のサンスクリット語写本断簡に関連する箇所に関してのみ、サンスクリット語写本 [VinSū MS] を用いてサンスクリット語テキストを再校訂し、その再校訂テキストを Co ne, sDe dge, dGa' ldan/Golden, sNar than, Peking の5つを校合したチベット訳テキストと対照させた上で、用いた。

⁶ *Upālipariṣcchā* は、*Vinaya-uttaragrantha* を構成する 10、ないし 11 の文献の内の一つである [CLARKE 2016: 50, 55]。なお、CLARKE 2016: 100–102, 116–124 は、*Vinaya-uttaragrantha* を構成する別の文献である 'Dul bar byed pa (*Vīnūta*) に相当するヴァージニア州のプライベート・コレクションにおけるサンスクリット語断簡 (F 20.9B) を取り扱っている。

⁷ *Vinaya-uttaragrantha* のチベット訳としてチベット大蔵経の内に 'Dul ba gzuñ bla ma と 'Dul ba gzuñ dam pa の2つがある [アイマー 1986; EIMER 1986 = 1992: 105–113] が、その内の 'Dul ba gzuñ bla ma は不完全なものであり [櫻部 1927: 817–818; Ōtani: 162–163; 岸野 2006]、このサンスクリット語断簡に対応する箇所を有していない。

⁸ ヴァージニア州のプライベート・コレクションには *Dīrghāgama* 内のスートラ名を列挙したウッダーナが現存しており、そのウッダーナにより *Apannakasūtra* が *Dīrghāgama* に収蔵されていたことが知られる [HARTMANN 2004: 123]。また、中央アジアにおいて知られていた *Dīrghāgama* も *Apannakasūtra* を収蔵していたと考えられる [DĀ (U.H.) 20–23, 61–65; SHT IV 32, Fragment 66 V5]。

⁹ 現在までに *Apannakasūtra* に属すると同定されている断簡は、以下の通りである：SHT III 966 (VII, p. 272; IX, p. 405); IV 165/32 (VI, p. 212), 165/37 (VI, p. 212); VI 1261 (?), 1579 (VIII, p.

サンスクリット語断簡に対する調査結果を表にしたものを以下に提示する。F 8.1, G 19.7, II.26.2 などの記号は、個々の断簡を表す。これらの記号の基本部分は、知られている限りでは、the Walters Art Museum, Baltimore で写本断簡の写真が撮影された際に付されたものであるが、付加的な数字が K. WILLE あるいは筆者によって追加されているものもある。また、以下の表は K. WILLE の研究成果も含むものであるので、K. WILLE による研究成果と筆者による研究成果とを区別するために、筆者によって同定された断簡は太字によって表わす。

1 *Vinayavibhaṅga*

Naissargikā Pāyattikā

条	サンスクリット語断簡	チベット訳; 漢訳
2	F 8.1 , F 15.2 (片面)	D Cha 44a1–58b2, F Cha 31b8–53a8, L Kha 70a3–91b5, N Cha 64a2–85b3, P Je 40b2–54a5, S Ca 469b4–489a2; Taishō 23: 712b8–714c26
4	F 7.1 + F 8.4, F 16.4 + G 19.7 + G 24.8 , G 21.7 + F 2.2, G 24.8 + G 19.10 + G 21.10 , G 24.11 + F 16.1, G 14.8 (Naissargikā Pāyattikā 5 を含む) + G 24.12	D 63b4–96b3, F 60b8–107b5, L 99a2–144b6, N 93b2–143a5, P 58b7–89b6, S Ca 495b4–Cha 26b6; Taishō 23: 716a22–722b12
5	F 15.2 (片面), F 16.4 , G 19.7 , G 19.10 , G 21.10 , G 24.5, G 24.2 (Naissargikā Pāyattikā 6 を含む)	D 96b3–102b3, F 107b5–116b5, L 144b6–153a6, N 143a5–152b3, P 89b6–94b5, S Cha 26b7–35a4; Taishō 23: 722b13–728a20
6	F 7.4, F 12.1 + F 12.6 + G 24.10 + G 24.13 + F 7.3 , G 24.3 + F 7.4 + G 24.2.1	D 102b3–107b1, F 116b5–117b3, L 153a6–160a8, N 152b4–160b1, P 94b5–98b3, S 35a4–41b7; Taishō 23: 728a21–729c19
18	F 22.3 + G 14.4 + G 19.1 (片面) ¹⁰	D 142b5–149b7, F 177b1–186b6, L 208b3–217a7, N 215a4–225b5, P 129b6–136b3, S 91b7–101b4; Taishō 23: 740a18–741c13

Pāyattikā

1	F 17.1.1 + F 9.3 + F 17.1.3, F 17.1.2 , F 17.1, F 9.2 , F 14.2 + F 9.1.2 (Pāyattikā 2 を含む), F 14.2.2 (Pāyattikā 2 を含む)	D Cha 215a4–228a5, F Cha 277b4–295a1, L Kha 306b7–323a7, N Cha 325a5–343b1, P Je 199b1–211a1, S Cha 194a6–211a2; Taishō 23: 760b2–763c1
---	--	---

208; IX, p. 422); Or.15003/44 (= BLSF I, pp. 79f.), Or.15007/267+369+505 (= BLSF III.1, pp. 78f.), Or.15009/624 (= DĀ (U.H.) No.2; BLSF III.1, pp. 430f.); Pelliot Sanskrit Numéro bleu 190 (= DĀ (U.H.) No. 1).

¹⁰ 『雑阿含経』第 911 経 (Taishō 2: 228b6–28)、もしくは『別訳雑阿含経』第 126 経 (Taishō 2: 421b12–c5) の可能性もある [生野 Forthcoming]。

2	II.5, II.26.2, II.30.2 , F 9.1, F 9.1.1 , F 17.2 + 17.5, F 27.2 + G 15.7 + G 16.6 + G 16.6.2 + II.30.2 + II.26.2 + II.5, II.9.1 + II.9.4 + II.25.3 + II.31.2 + F 27.2 + G 16.6.1 + G 15.7 (Pāyattikā 3 を含む)	D 228a5–239a3, F 295a1–311b6, L 323a7–339a1, N 343b1–360a6, P 211a1–222a4, S 211a2–226b3; Taishō 23: 763c2–767c18
3	II.2 + G 16.8 (Pāyattikā 4 を含む)	D 239a3–251b7, F 311b6–329b8, L 339a1–356a7, N 360a6–379b1, P 222a4–234a2, S 226b3–244a5; Taishō 23: 767c19–770a11
4	II.4.1 + F 6.1.1 + G 25.7 (Pāyattikā 5 を含む)	D 251b7–255b1, F 329b8–334b5, L 356a7–361a4, N 379b1–384b3, P 234a2–237a2, S 244a5–249a6; Taishō 23: 770a12–b22
5	F 6.1.2 + G 22.17 , II.4.2 + F 6.1.3 + G 22.17 (Pāyattikā 6 を含む)	D 255b1–259a7, F 334b5–339b7, L 361a4–366a6, N 384b3–390a5, P 237a2–240a6, S 249a6–254b2; Taishō 23: 770b23–771c6
6	F 4.1 + II.7 (Pāyattikā 7 を含む) [HARTMANN & WILLE 2014: 153]	D 259a7–261a6, F 339b7–342a8, L 366a6–368b6, N 390a5–393a2, P 240a6–241b8, S 254b2–257a2; Taishō 23: 771c7–772a17
7	G 25.1 + II.6.1 + G 14.1 + II.6.2 + II.6.3 + II.7.2, II.3 + G 14.2 (Pāyattikā 8 を含む)	D 261a6–265b3, F 342a8–347a7, L 368b6–374a6, N 393a2–399a6, P 241b8–245b6, S 257a2–262b3; Taishō 23: 772a21–773c13
8	II.8.2 + II.8.1 + II.9.5 + II.9.3 + II.23.1 + II.26.3 (Pāyattikā 9 を含む), II.9.2	D 265b3–274b2, F 347a7–359a6, L 374a6–385b7, N 399a6–412b3, P 245b6–254a2, S 262b3–274a4; Taishō 23: 773c14–774b25
9	F 3.4.1 + F 3.4.2 + G 16.3.1 (Pāyattikā 10 を含む)	D 274b2–276b1, F 359a6–362a1, L 385b7–388a6, N 412b3–415a6, P 254a2–255b4, S 274a4–276b4; Taishō 23: 774b26–775a19
10	G 16.3.2 + F 14.4	D 276b1–279b2, F 362a1–365b7, L 388a6–392a6, N 415a6–419b3, P 255b4–258a6, S 276b4–280b1; Taishō 23: 775a20–c6
11	F 14.3 + G 16.3.3	D 279b2–287a7, F 365b8–377b1, L Ga 1b1–14a3, N 419b3–431a7, P 258a6–265a7, S 280b1–290b6; Taishō 23: 775c10–777a13
81	F 19.2.2B	D Ña 73a1–76a1, F Ña 94a1–98b4, L Ña 125b7–130a5, N Ña 111a3–116a3, P Te 65b5–68b7, S Ja 261b7–266b7; Taishō 23: 865c28–866b24

Pratideśanīyā

3-4	F 25.5	D Ña 231a4-240a4, F Ña 309b4-320b6, L Ña 337a4-347b8, N Ña 359a1-372b6, P Te 215a3-223b3, S Ja 496b3-509b3; Taishō 23: 900a5-901b15
-----	---------------	---

2 *Vinaya-uttaragrantha* 内の *Upālipariṣcchā*

	サンスクリット語断簡	チベット訳
Prāṭideśanikā ¹¹ 2-4	F 15.1 + 15.3	D Na 232b5-234a5, F Da 196b2-198b6, L Da 263a8-265b1, N Na 350b4-353a3, P Pe 215b6-217b1, S Da 320b5-322b6

3 *Samyuktāgama*¹²

『雑阿含経』 (『別訳雑阿含 経』) sūtra 番号	サンスクリット語 断簡	漢訳 Taishō, no. 99/(100) ≈ パーリ文献 PTS
407	G 19.3 (表面) ¹³	Taishō 2: 108c28-109a26 ≈ SN 56.41 [V 446.25-448.23]
414	G 19.3 (裏面) ¹⁴	Taishō 2: 110a19-b4

¹¹ *Upālipariṣcchā* における *Prāṭideśanikā* という術語は *Vinayavibhaṅga* における *Pratideśanīyā* に対応するものであるが、語形が僅かに異なっている。*Upālipariṣcchā* と *Vinayavibhaṅga* とは異なる文献であるが、同一の文献においてもある同一の術語に対して異なる語形が用いられる場合がある [SHŌNO 2016: 324, n. 25]。

¹² ヴァージニア州のプライベート・コレクションにおいて *Samyuktāgama* に属すると同定されている写本断簡は、筆者が引き受けた写本断簡の内にあるもの以外にも存在する [CHUNG 2008: 33; HARTMANN & WILLE 2014: 147, 151; CHUNG Forthcoming]。既に記した通り、筆者が引き受けた写本断簡は *Vinayavibhaṅga* に属する可能性のあったものだけであり、それ以外の文献に属することが判明していた断簡は筆者の担当ではない。

また、これらの断簡が全体として *Samyuktāgama* そのものに属するのではなく、単経もしくは *Samyuktāgama* の経を含む何らかの ‘composite manuscript’ [HARTMANN 2017: 96, n. 13: ‘The term “composite manuscript” (Ger. *Sammelhandschrift*) is used here in the sense of a non-canonical arrangement of texts selected from one or more genres of Buddhist literature’] に属するという可能性も視野に入れておく必要はある。しかしながら、以下に述べる三点から、現時点ではこれらの断簡は *Samyuktāgama* そのものに属する可能性が高いと考えている。先ず、*Samyuktāgama* の内の一つの経だけではなく、複数の経を記述している断簡もあり、その順序は *Samyuktāgama* と同じ順序であるということ、次にこれらの断簡が対応するのは *Samyuktāgama* の内のある一箇所だけではなく複数箇所に及んでいるということ、最後に、複数のフォリオが癒着している断簡を除いて、*Samyuktāgama* にのみ対応しており、*Samyuktāgama* 以外の文献に対応するものが一緒に記述されているという断簡は見いだされていないことという三点である。

¹³ この断簡は、第 160 葉の表面に属する。J.-i. CHUNG によって第 160 葉の表面に属する他の断簡 (F 20.8 + G 17.1) が同定されている [CHUNG Forthcoming]。

¹⁴ この断簡は、第 (1)[6]1 葉の裏面に属する。J.-i. CHUNG によって第 161 葉の裏面に属する

482–483	G 14.6 + 2627/1.3A ¹⁵	Taishō 2: 122c24–123b19 ≈ AN 5.176 [III 206.24–208.12]; SN 36.29 [IV 235.17–237.33]
551	F 8.3	Taishō 2: 144a28–c19 ≈ SN 22.3 [III 9.11–12.27], Nidd I 197.1–201.2
552–553	F 8.2	Taishō 2: 144c20–145a23 ≈ SN 22.4 [III 12.28–13.27]; 35.130 [IV 115.1–116.11].
907–908 (/122–123)	F 22.3 + G 14.4 + G 19.1 (片面), G 22.9	Taishō 2: 227a2–c11 (/ 420a7–c9) ≈ SN 42.2–3 [IV 306.10–309.30]
917–918 (/143–144)	F 18.4	Taishō 2: 232b24–233b6 (/ 428b4–429a8) ≈ AN 3.137–138 [I 287.28–290.32]; 9.22.1–9 [IV 397.1–399.26]
919–922 (/145–148)	F 25.1	Taishō 2: 233b13–234b20 (/ 429a9–429c10) ≈ AN 3.139 [I 290.34–291.20]; 9.22 [IV 397.1–400.19]; AN 3.94 [I 244.9–245.5]; AN 4.256–257 [II 250.1–252.4]; AN 4.113 [II 114.4–116.22]
923–925 (/149–150)	F 18.3	Taishō 2: 234b21–235c26 (/ 429c11–430c9) ≈ AN 4.111 [II 112.1–113.19]; AN 8.13–14 [IV 188.14–195.12]
925–926 (/150–151)	F 18.2	Taishō 2: 235b22–236b11 (/ 430a28–431b4) ≈ AN 8.13 [IV 188.14–190.15]; AN 11.10 [V 322.33–326.19]
929 (/ 154)	F 13.1, F 13.4	Taishō 2: 236c29–237b20 (/431c12–432b13) ≈ AN 8.25 [IV 220.15–222.4]

4 *Dirghāgama*

Sūtra 名	サンスクリット語断簡	パーリ文献 PTS
<i>Apannakasūtra</i>	G 16.2 (片面), G 21.11 ¹⁶	MN 60 [I 400.28–413.29]

5 未同定

II.8.4, II.9.6, II.18.2, II.20.3, II.21.1, II.21.2, II.25.6, II.26.1, II.31.1, II.31.4, II.31.6, II.31.7, F 20.1, F 21.2, F 27.1, G 15.3, G 20.1, G 20.5, G 25.2, G 25.3

他の断簡 (G 15.4 + G 17.2) が同定されている [CHUNG Forthcoming]。

¹⁵ 2627/1.3A を含むシリアル番号 2627/1 は、かつてスコイエン・コレクションの一部であったが、現在は Department of Archaeology and Museums at the Ministry of Culture, National Heritage and Integrations, Pakistan に返還されている。

¹⁶ これら二つの断簡は筆者が研究を引き継いだ後に Klaus WILLE によって同定されたが、これらの断簡に関しても筆者が引き受けて研究を行なった。

II. フォーマット

Vinayavibhaṅga, *Vinaya-uttaragrantha* 内の *Upālipariṣṭhā*, *Samyuktāgama*, *Dīrghāgama* の *Apannakasūtra* に属する完全なフォリオは一枚も現存しない。しかし、繰り返しや慣用句、決まり文句などからそれぞれのフォーマットを推定することは可能である。推定されたフォーマットは、以下の通りである。

- 1 *Vinayavibhaṅga*: 表面裏面とも 10 行で書かれ、各行は約 84 音節である。紐穴のための空間が 4 行目から 7 行目にかけてあり、それぞれの行の頭から約 25 音節目に始まり、約 6 音節分のスペースを占める。
- 2 *Upālipariṣṭhā*: 表面裏面とも 9 行で書かれ、各行は約 82 音節である。紐穴のための空間が 4 行目から 6 行目にかけてあり、それぞれの行の頭から約 23 音節目に始まり、約 8 音節分のスペースを占める。
- 3 *Samyuktāgama*: 表面裏面とも 10 行で書かれ、各行は約 90 音節である。紐穴のための空間が 4 行目から 7 行目にかけてあり、それぞれの行の頭から約 25 音節目に始まり、約 10 音節分のスペースを占める。¹⁷
- 4 *Apannakasūtra*: 表面裏面とも 8 行で書かれ、各行は約 70 音節である。紐穴のための空間が 3 行目から 6 行目にかけてある。

これらのフォーマットに基づいて、ある断簡がどの文献に属するのかを推測しうる場合もある。ただし、*Vinayavibhaṅga* と *Samyuktāgama* のフォーマットは非常に類似している。

III. 複数のフォリオが癒着した断簡

これらの写本断簡の内には、残念ながら複数のフォリオが癒着したままのものがある。もし複数のフォリオが癒着している写本断簡を別々のフォリオに分離することができたならば、現在では覆い隠されてしまっているサンスクリット語テキストを回収することが見込まれるが、現在の状況ではそれを行なうことは難しい¹⁸。

さらにまた、複数のフォリオが癒着しているということから新たな問題が生じるので、それらの事例を以下に列挙する。

- 二つの断簡が接合しうるにもかかわらず、それぞれに癒着しているフォリオの枚数が異なる場合：

¹⁷ Cf. CHUNG Forthcoming.

¹⁸ HARTMANN & WILLE 2014: 138–139.

F 6.1 (F 6.1.2 と F 6.1.3) と II.4 (II.4.1 と II.4.2) は外形的に接合しうる断簡である。従って、裏面のテキスト (F 6.1.3 と II.4.2) は連続してつながっている (Pāyattikā 第 5–6 条)。しかし、表面の主要部分におけるテキスト (F 6.1.2 と II.4.1) は連続しておらず、異なっている (F 6.1 の表面は Pāyattikā 第 5 条、II.4 の表面は Pāyattikā 第 4–5 条に属している)。このことは、F 6.1 と II.4 のそれぞれにおいて癒着しているフォリオの枚数が異なるということを示している。結論として F 6.1 にはフォリオ 249 と 250 の 2 枚のフォリオが癒着しているが、II.4 にはフォリオ 248 と 249、250¹⁹ の 3 枚のフォリオが癒着していると考えられる²⁰。G 16.3.1–3、及び G 19.3 に関しても同様の問題が指摘されうる。

- 断簡が表面を上にして順番通りに癒着しているとは限らない場合：
F 15.2 は、片方の面 (A) は Naissargikā Pāyattikā 第 2 条に相当するが、もう一方の面 (B) は Naissargikā Pāyattikā 第 5 条に相当している。Naissargikā Pāyattikā 第 2 条は Naissargikā Pāyattikā 第 5 条に先行するので、A 面が表面で、B 面が裏面であるという想定がなされがちである。しかし、一枚のフォリオからなる別の断簡 F 8.1 が F 15.2 の A 面に直接後続すると考えられうるので、F 15.2 と F 8.1 が同一の写本に属しているならば、F 15.2 の A 面は裏面であるということになる。一方、F 15.2 の B 面が表面であるのか裏面であるのかを判断する材料となる他の断簡は、存在しない。F 15.2 が示唆している状況は、断簡が表面を上にして順番通りに²¹癒着しているとは限らないということである²²。
- ある断簡のそれぞれの面が異なる文献に属する場合：
F 22.3 + G 14.4 + G 19.1 の片方の面 (A) は『雑阿含経』第 907–908 経（もしくは『別訳雑阿含経』第 122–123 経）に相当する。他方、もう一方の面 (B) は、二つの可能性があり、*Vinayavibhaṅga* の Naissargikā Pāyattikā 第 18 条、あるいは『雑阿含経』第 911 経（もしくは『別訳雑阿含経』第 126 経）に対応しうる。しかし、現存する翻訳テキストの文言に基づく限り、『雑阿含経』第 911 経（『別訳雑阿含経』第 126 経）よりも *Vinayavibhaṅga* の Naissargikā Pāyattikā 第 18 条によく対応している。従って、F 22.3 + G 14.4 + G 19.1 は、両面が異なるテキストに属している可能

¹⁹ 249 というフォリオ番号は保持されているが、248 というフォリオ番号の箇所は破損していて現存しない。また、250 というフォリオ番号は、フォリオ 249 と癒着しているので覆い隠されていて確認することができない。従って、上述の結論はチベット訳・漢訳を参考にして引き出されたものである。

²⁰ 生野 2016.

²¹ Naissargikā Pāyattikā 第 2 条と第 5 条の間に位置する Naissargikā Pāyattikā 第 4 条に相当する断簡も、このプライベート・コレクションの内に存在している。

²² 生野 2016.

性がある²³。複数のフォリオが癒着している梵文断簡において、両面が異なるテキストに属しているものとして次のものがある：2627/1.3 (『雑阿含経』第 482–483 経と *Vinayavastu* の *Bhaisajyavastu*)、及び G 16.2 (*Dirghāgama* の *Apannakasūtra* と *Vinayavastu* の *Bhaisajyavastu*)。この場合も、それぞれの面が表面であるのか裏面であるのかということは、明らかにしえない。なお、*Udānavarga* 27.40d–28.2c 偈に相当する小さな断片である F 19.2.1B (Klaus WILLE による同定) が *Pāyattikā* 第 81 条に相当する F 19.2.2B の上に付着しているのも、類似の例として挙げられうる。

- ある一つの断簡の両面がある一つのフォリオの同一の面に属する場合：
F 13.1 は『雑阿含経』第 929 経、もしくは『別訳雑阿含経』第 154 経に相当する。これらの漢訳、及びパラレルである *Dhsk* 17v5–6, 18v1–4 や *Abhidh-k-bh* (P) 215.1–3、*Abhidh-k-vy* 377.15–16 を参考にすると、F 13.1 は A 面・B 面の両面ともある一つのフォリオの同一の面に属していると推測されうる。これは一枚のフォリオが折り曲げられた可能性が高い²⁴。また、F 13.1A+B が構成するある一つのフォリオのある一つの面が、このフォリオの表面であるのか裏面であるのかを決定することはできない²⁵。

断簡を同定することができた場合、通常はその同定された断簡の表面と裏面を決定することができる。しかし、複数のフォリオが癒着した断簡の場合、当該の断簡を同定することができた後であっても表面と裏面を決定することが不可能な場合も存在する。

IV. *Vinayavibhaṅga* の帰属関係

プライベート・コレクション内の *Vinayavibhaṅga* は、『根本説一切有部毘奈耶』のチベット訳と漢訳に対応しているので、説一切有部内の根本説一切有部律を伝持した分派²⁶に帰属する²⁷。帰属関係を簡潔に確認するために、律の術語である *Pāyattikā* に関する語義説明を以下に取り上げる。*Pāyattikā* に関する語義説明

²³ 生野 Forthcoming.

²⁴ F 13.1 の A 面と B 面には通常の断簡に見られるのとは異なる次の相違点が存在する: A 面は紐穴を通すための空間があるのに対して、B 面は紐穴を通すための空間を有さない。このことは、A 面はあるフォリオの左側の部分を構成するのに対して、B 面は中央から右側の部分を構成していることを示している。さらに、天地の向きは通常は両面において逆になるのに対して、F 13.1 の A 面と B 面の天地の向きは同一である。

²⁵ 生野 2015.

²⁶ この分派の名称に関する議論は、SHŌNO 2017: 53, n. 2 に挙げた諸々の研究を参照のこと。

²⁷ このコレクション内の *Samyuktāgama* の断簡は『雑阿含経』に対応しているが、『雑阿含経』も根本説一切有部律を伝持した分派に帰属すると考えられている [榎本 1980, 2001; ENOMOTO 1986; 平岡 2003]。

がサンスクリット語断簡において部分的ではあるが保存されているので、その箇所を『根本説一切有部毘奈耶』のチベット訳と漢訳、並びに『十誦律』系統における語義説明と比較する²⁸。

Pāyattikā の語義説明に関して、サンスクリット語写本断簡においては省略された形と省略されていない形の 2 通りの記述方式が存在していたようである²⁹。先ず、省略された形式は、以下の通りである [G 14.2 + II.3r10 (Pāyattikā 7)]。

pāyattiketī dahati pacati pāta(ya)ti p(ū)rvavat*³⁰

Pāyattikā とは、焼き、煮、墮落させるである、先の通りに[省略]。

省略されていない形式は、残念ながら破損していて完全ではないが、以下の通りである [F 17.1v10 (Pāyattikā 1), F 17.5r9 (Pāyattikā 2), F 14.4r9 (Pāyattikā 10)]。

/// (ā)pattir adeśitā apratideśitā āvaraṇaṃ karoti kuśalānāṃ dharmānāṃ tenāha pāyattiketī |

[その]罪は、示されず面と向かって示されなかったならば、諸々の善いこと（善法）にとっての障害を作る。それゆえ Pāyattikā と言う。

次に、『根本説一切有部毘奈耶』のチベット訳と漢訳における語義説明は、以下の通りである。上述のサンスクリット語断簡が対応している箇所は、太字によって表わす。

E.g. *Pāyattikā 1 [D Cha 225b6–7, P Je 208b3–4, S Cha 207b3–4, etc.]:

ltuñ byed do źes bya ba ni sems can dmyal ba dañ | dud 'gro dañ | yi dags ñan soñ dañ | ñan 'gro dañ | log par ltuñ ba dag tu **sreg par byed** | 'tshod par byed | **ltuñ bar byed pa'o** || gźan yañ ltuñ ba de ma bśags śiñ so sor ma bśags na dge ba'i **chos rnam la sgrīb par byed pa ste** | des na ltuñ byed do źes gsuñs so ||

*Pāyattikā とは、衆生を地獄と畜生と餓鬼と悪趣と悪墮において焼き、煮、墮落させる、である。さらにまた、その罪は、告白されず面と向かって告

²⁸ ここで取り上げる術語自体の考察に関しては、平川 1993: 48–52, 1994: 6–34, 2000: 294–301、及び VON HINÜBER 1985: 63–66 を参照のこと。

²⁹ 以下のサンスクリット語断簡のテキストにおいて使用する記号表記は、次の通りである：() は欠損箇所での補い、* はヴィラーマ、/// は当該断簡の破損を表わす。

³⁰ Cf. Divy 544.10: pāpāntiketī dahati pacati yātayati pūrvavat. この文を含む Divy の関連箇所に関して HIRAOKA 1998: 425 は ‘the compiler of the *Divy*. forgot to omit unnecessary portions, namely the Vinaya specific details of the establishment of the rule, going so far as to include even the commentary on the rule as well’ と述べ、Divy が『根本説一切有部毘奈耶』から借用した例として挙げている。これに関して、Divy 544.10 における pūrvavat による省略は Divy においては先行する同一の記述が存在しないので、Divy だけでは理解することができないという点も付言される。

白されなかったならば、諸々の善いこと（善法）に対して障害を作る。それゆえ *Pāyattikā と言われた。

『根本説一切有部毘奈耶』卷二十五 [Taishō 23: 762c4–7]:

波逸底迦者、是燒煮墮落義。謂犯罪者墮在地獄傍生餓鬼惡道之中受燒煮苦。又此罪若不懺懃説除、便能障礙所有善法。此有諸義故、名波逸底迦。

一方、『十誦律』系統において対応する術語の語義説明は、以下の通りである。

VinVibh (Sa), Pātayantikā-dharma 5.7, 11.13, 38.14, 41.7, 59.11:

pātayantikā pacati dahaty uddahaty avyutthitasyāvaraṇakṛtyaṃ karoti tenāha pātayantikā |

Pātayantikā [とは]、煮る、焼く、焼き尽くすである。[その罪から]立ち出していない[出家者]にとっての障害に関することを作る。それゆえ Pātayantikā [と]言う。³¹

『十誦律』卷九 [Taishō 23: 63c18–20]:

波夜提者、燒煮覆障。若不悔過、能障礙道。

以上の通り、プライベート・コレクションにおける *Vinayavibhaṅga* の Pāyattikā の語義説明は、『十誦律』系統ではなく、『根本説一切有部毘奈耶』に対応している。

略号

Abhidh-k-bh (P): *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*. Ed. P. PRADHAN. Tibetan Sanskrit Works Series, no. 8. Patna: K.P. Jayaswal Research Institute¹1967.

Abhidh-k-vy: *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā*. Ed. U. WOGIHARA. Tokyo: The Publishing Association of Abhidharmakośavyākhyā 1932–36.

AN: *Āṅguttara-Nikāya*. Ed. R. MORRIS, E. HARDY. 5 vols. London: Pali Text Society 1885–1900.

BLSF I: *Buddhist Manuscripts from Central Asia: The British Library Sanskrit Fragments*, Vol. I. Ed. S. KARASHIMA & K. WILLE. Tokyo: The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University 2006.

BLSF III: *Buddhist Manuscripts from Central Asia: The British Library Sanskrit Fragments*, Vol. III.1–2. Ed. S. KARASHIMA, J. NAGASHIMA & K. WILLE. Tokyo: The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University 2015.

DĀ (U.H.): Jens-Uwe HARTMANN. *Untersuchungen zum Dīrghāgama der Sarvāstivādins*. Unpublished Habilitationsschrift. Göttingen 1992.

³¹ Cf. VinVibh (Sa), p. 10, n. 7.

- Dhsk: *Fragmente des Dharmaskandha: Ein Abhidharma-Text in Sanskrit aus Gilgit*. Ed. S. DIETZ. Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften in Göttingen, Philologisch-historische Klasse, dritte Folge, 142. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht 1984.
- Divy: *The Divyāvadāna. A Collection of Early Buddhist Legends*. Ed. E. B. COWEL & R. A. NEIL. Cambridge: University Press, 1886.
- MN: *Majjhima-Nikāya*. Ed. V. TRENCKNER, R. CHALMERS. 3 vols. London: Pali Text Society 1888–1899.
- Nidd I: *Mahāniddeśa*. Ed. L. DE LA VALÉE POUSSIN & E. J. THOMAS. London: Pali Text Society 1916.
- Ōtani: 影印 北京版 西藏大藏經 — 大谷大学図書館蔵 — 總目錄附索引. 東京: 西藏大藏經研究会 1961.
- SHT: *Sanskrihandschriften aus den Turfanfunden*, Teil 1–12. Ed. E. WALDSCHMIDT et al. Verzeichnis der Orientalischen Handschriften in Deutschland, X.1–12. Wiesbaden/Stuttgart: Franz Steiner, 1965–2017 [Teil 1–3 (1965–1971), ed. E. WALDSCHMIDT; Teil 4–5 (1980–1985), ed. L. SANDER & E. WALDSCHMIDT; Teil 6–12 (1989–2017), ed. K. WILLE].
- SN: *Samyutta-Nikāya*. Ed. L. FEER. 5 vols. London: Pali Text Society, 1884–1898.
- Taishō: 大正新脩大藏經. Ed. 高楠順次郎 & 渡邊海旭. 100 vols. Tokyo 1924–1932.
- Udānavarga*: Ed. F. BERNHARD. Vols. 1–2. Sanskrittexte aus den Turfanfunden, 10; Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften in Göttingen, 54. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1965–1968.
- VinSū MS: *The Facsimile Edition of a Collection of Sanskrit Palm-leaf Manuscripts in Tibetan dBu med Script*. Ed. Study Group of Sanskrit Manuscripts in Tibetan dBu med Script, Tokyo: Institute for Comprehensive Studies of Buddhism, Taishō University 2001.
- VinVibh (Sa): Valentina ROSEN. *Der Vinayavibhaṅga zum Bhikṣuprātimokṣa der Sarvāstivādins, Sanskritfragmente nebst einer Analyse der chinesischen Übersetzung*. Deutsche Akademie der Wissenschaften zu Berlin, Institut für Orientforschung, Nr. 27; Sanskrittexte aus den Turfanfunden, 2. Berlin: Akademie-Verlag 1959.

参考文献

- アイマー, ヘルムート (岡田行弘訳) 1986 「西藏大藏經甘殊爾の戒律部におけるテキストの配列順序」 『佛教學』 第 20 号: 1–10.
- 榎本文雄 1980 「Udānavarga 諸本と雜阿含經、別訳雜阿含經、中阿含經の部派帰属」 『印度學佛教學研究』 第 28 卷第 2 号: 99–102.
- 2001 「『雜阿含經』の訳出と原典の由来」 『石上善應教授古稀記念論文集 仏教文化の基調と展開』 第一卷、山喜房仏書林, 31–41.

- 岸野亮示 2006 「2 つの『ウッタラグラント』(「ウパーリ問答」の考察) 『印度學佛教學研究』第 55 卷第 1 号: 385–382.
- 櫻部文鏡 1927 「西藏律典研究豫報」 『大谷學報』第 9 卷第 4 号: 805–824.
- 生野昌範 2015 「Saṃyuktāgama の新出梵文写本断簡」 『インド論理学研究』第 8 号: 161–176.
- 2016 「Vinayavibhaṅga の梵文写本断簡における問題点」 『印度學佛教學研究』第 64 卷第 2 号: 830–825.
- Forthcoming 「新出サンスクリット語写本断簡に見られる諸文献」 『印度學佛教學研究』第 67 卷
- 平岡聡 2003 「『雑阿含経』と説一切有部の律蔵」 『印度學佛教學研究』第 51 卷第 2 号: 818–813.
- 平川彰 1993 『平川彰著作集 第 15 卷 二百五十戒の研究 II』 春秋社.
- 1994 『平川彰著作集 第 16 卷 二百五十戒の研究 III』 春秋社.
- 2000 『平川彰著作集 第 11 卷 原始仏教の教団組織 I』 春秋社.
- ALLON, Mark, Richard SALOMON, Geraldine JACOBSEN & Ugo ZOPPI. 2006. “Radiocarbon Dating of Kharoṣṭhī Fragments from the Schøyen and Senior Manuscript Collections.” In *Buddhist Manuscripts*, Vol. III, Manuscripts in the Schøyen Collection, ed. Jens BRAARVIG *et al.*, 279–291. Oslo: Hermes Publishing.
- CHUNG, Jin-il. 2008. *A Survey of the Sanskrit Fragments Corresponding to the Chinese Saṃyuktāgama: 雑阿含経相当梵文断片一覽*. Tokyo: Sankibo Busshorin.
- . Forthcoming. “A Sanskrit Fragment Corresponding to Sūtra 481 of the *Za-ahan-jing*.” *Hokkaido Journal of Indian Philosophy and Buddhism* 3.
- CLARKE, Shayne. 2016. “The ‘*Dul bar byed pa (Vinītaka)* Case-Law Section of the Mūlasarvāstivādin *Uttaragrantha*: Sources for Guṇaprabha’s *Vinayasūtra* and Indian Buddhist Attitudes towards Sex and Sexuality.” *Journal of the International College for Postgraduate Buddhist Studies* 20: 49–196.
- EIMER, Helmut. 1986. “Zur Reihenfolge der Texte in der Abteilung Vinaya des tibetischen Kanjur,” *Zentralasiatische Studien* 20: 219–227.
- . 1992. *Ein Jahrzehnt Studien zur Überlieferung des tibetischen Kanjur*, Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, 28, Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien.
- ENOMOTO, Fumio. 1986. “On the Formation of the Original Texts of the Chinese Āgamas.” *Buddhist Studies Review* 3.1: 19–30:
- HARTMANN, Jens-Uwe. 2004. “Contents and Structure of the *Dīrghāgama* of the (Mūla-) Sarvāstivādins.” *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology* 7: 119–137.
- . 2017. “King Prasenajit Bemoans the Death of His Grandmother: A Study of the Manuscript SHT 7185.” *International Journal of Buddhist Thought & Culture* 27.1: 73–105.

- HARTMANN, Jens-Uwe & Klaus WILLE. 2014. “The Manuscript of the *Dīrghāgama* and the Private Collection in Virginia.” In *From Birch Bark to Digital Data: Recent Advances in Buddhist Manuscript Research*. Papers Presented at the Conference Indic Buddhist Manuscripts: The State of the Field, Stanford, June 15–19, 2009, Österreichische Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-Historische Klasse, Denkschriften, 460, ed. P. HARRISON & J.-U. HARTMANN, 137–155. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- VON HINÜBER, Oskar. 1985. “Die Bestimmung der Schulzugehörigkeit buddhistischer Texte nach sprachlichen Kriterien.” In *Zur Schulzugehörigkeit von Werken der Hīnayāna-Literatur*, Vol. I. Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften in Göttingen, Philologisch-historische Klasse, 149, ed. H. BECHERT, 57–75, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- HIRAOKA, Satoshi. 1998. “The Relation between the *Divyāvadāna* and the Mūla-sarvāsivāda Vinaya.” *Journal of Indian Philosophy* 26.5: 419–434.
- MELZER, Gudrun. 2014. “A Palaeographic Study of a Buddhist Manuscript from the Gilgit Region: A Glimpse into a Scribes’ Workshop.” In *Manuscript Cultures: Mapping the Field*, Studies in Manuscript Cultures, 1, ed. J. B. QUENZER, D. BONDAREV & J.-U. SOBISCH, 227–272. Berlin/Munich/Boston: De Gruyter.
- SANDER, Lore. 1968. *Paläographisches zu den Sanskrithandschriften der Berliner Turfansammlung*, Verzeichnis der Orientalischen Handschriften in Deutschland, Supplementband 8. Wiesbaden: Franz Steiner.
- . 2007. “Confusion of Terms and Terms of Confusion in Indian Palaeography.” In *Expanding and Merging Horizons. Contributions to South Asian and Cross-Cultural Studies in Commemoration of Wilhelm Halbfass*, Österreichische Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-Historische Klasse, Denkschriften 351; Beiträge zur Kultur- und Geistesgeschichte Asiens, 53., ed. K. PREISENDANZ, 121–139. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- . 2014. “Dating and Localizing Undated Manuscripts.” In *From Birch Bark to Digital Data: Recent Advances in Buddhist Manuscript Research*. Papers Presented at the Conference Indic Buddhist Manuscripts: The State of the Field, Stanford, June 15–19, 2009, Österreichische Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-Historische Klasse, Denkschriften, 460, ed. P. HARRISON & J.-U. HARTMANN, 171–186. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- SHŌNO, Masanori. 2016. “More Folios of the *Prātimokṣa-Vibhaṅga* of the Mahā-sāṃghika-Lokottaravādins in Early Western Gupta Script.” In *Buddhist Manuscripts IV*, Manuscripts in the Schøyen Collection, ed. J. BRAARVIG, 321–327, Oslo: Hermes Academic Publishing.
- . 2017. “Local Buddhist Monastic Agreements among the (Mūla)sarvāstivādins.” *Buddhist Studies Review* 34.1: 53–66.

Summary

Newly Identified Fragments in a Private Collection in Virginia, USA

Masanori Shōno

This paper investigates a variety of fragments in a private collection in Virginia, USA. At the commencement of my study, all fragments were thought to belong to the *Vinayavibhaṅga* of the (Mūla)sarvāstivādins. However, my study has revealed that some fragments belong to the *Upālipariṣcchā* in the *Vinaya-uttaragrantha* and some to the *Samyuktāgama*. The new Sanskrit fragments enrich our knowledge of script, vocabulary, diction and syntax of canonical texts.

Because fragments of the *Vinayavibhaṅga*, the *Upālipariṣcchā* in the *Vinaya-uttaragrantha*, the *Samyuktāgama*, and the *Apannakasūtra* in the *Dīrghāgama* were identified, we can estimate each format from repetition, idioms, and so on. The estimated formats differ in each corpus. On the basis of formats we can sometimes judge which corpus a fragment could belong to.

Some folios of the Sanskrit fragments remain stuck together, which gave rise to the following issues:

- 1 It is unknown how many folios are stuck together between both sides of a fragment which some folios are heaped in.
- 2 In case both sides of a fragment belong to different folios or different corpora, it is difficult to decide whether the both sides face the same way up.
- 3 It is difficult to decide which side, recto or verso, each side of a fragment belongs to.

In the case of fragments being stuck together, the above issues remain unsolved, even though the identification of the fragments are successfully made with the help of Tibetan and Chinese translations as well as parallel Sanskrit texts. Furthermore, there is a fragment, of which both sides could belong to the same side of the same folio.